

新春雑感

大川創業株式会社
代表取締役会長

大川 真一郎

明けましておめでとうございます。この新春雑感を書き初めてから、つい昨日の様に思っていたのが、すでに四年前だ。一日の経つのも早い。それだけ私のスピードが年々周りのスピードについていけないからだ。

さて、恒例の今年の干支、丙申（ひのえ・さる、ヘイシン）は安岡正篤先生の「干支の活学」によれば、「丙」は「甲」で長い間温めていた新しい芽が生まれ、世間の荒波にもまれながら、右往左往してさまよう「乙」の年を経「丙」では家の内から人が蓋を取り出している。つまり学校でも企業でも、新しいプロジェクト、新発見、新製品の開発、新事業、新しい法律や制度の方針を定めて素直に推進する行動の年である。それを家にこもっていたが、何やら世間が騒がしくなってきたので、どれどれと天窓開けてキョロキョロと周りを見渡していたのでは、自分だけが遅れを取っている。気づいたら一早く追いつく事。「申」はもの申す、申告する。答申する。発表する年に「イ」をつけると「伸」、大いに伸びる、伸長、発展の年となる。「ネ」をつけて「神」がかり的な助けもある。「丙」と「申」とが重なって伸長、発展は60年間周期の干支のなかでそうざらにあるものではない。干が良くても「午」のように天上に伸びていない。「未」のように、未だ未だという年もある。今年は60年に一度のチャンス到来の年である。心して大いに推進すべき年である。今年はそういう年だから、昨年の書き初めは「果報は練って待て」と書いた。来年は良い年になるのは解っているから、有頂天になったり、怠けたり、浮かれたりせず、工夫に工夫を重ね、大いに努力して明日に備えるという意味で書いた。今年は「究極の喜び顧客の笑顔」と書いた。どの様な立場にあっても、万事相手の立場に立って相手はどうすれば喜ぶかを常に考えて、相手が感動して、にっこりほほ笑む光景を常に念頭に描き続けければ、成功間違いなし。幾ら儲けてやろうと自分の慾ばかり考えていると大きく足を掬われる事になる。常に相手の立場で考えると良い事が飛び込んでくる。論語で孔子は「人がして欲しくない事をしてはならぬ」と言った。キリストは聖書に「人にせられんと思ふ事はその如くせよ」と言った。他人への思いやり、オモテナシは必ず自分への幸せがやってくる。全てのひとの幸せを願い、それを究極の

喜びとしたいと結んだ。笑顔の街づくり。いよいよコンパクトシティ誕生の時が来た。

工業会主催のコンベンションホールでのオペラシリーズも昨年は「フィガロの結婚」で超満員。500席をオーバーし補助椅子を出した。ロビーに掲げた台風のパネルは観客と出演者で600名以上の人の目に触れた事になる。これだけ人を集められる企画は他にないので、一階もロビーを活用して阪大の社会貢献ぶりをもっとアピールして頂きたい。今回のフィガロに来て頂いた方々はお気付きの事と思うがオーケストラは過去16回の中で突出して上手かった。過去は単独のオーケストラだけだったが、今回のオペラパーク管弦楽団は関西の各オーケストラからトップクラスを集めて編成したので、メンバーも自分の所属するオーケストラのレベルと違う事を感じ、日頃やらないオペラ曲を演奏できる喜びを感じ、自習もやってきたのか、初合わせの時からプロ級の音色を出してくれるので、指揮者のバブアゼ先生も最初から高度な技術指導をされ、初日の練習で本番の成功を予感した。私は阪大交響楽団で2年生の後期から卒業後7年間主席クラリネット奏者を務め、その間3年生でモーツァルト交響曲39番3楽章のソロを演奏し終わるや拍手が鳴り止まず、4年生でモーツァルトのクラリネット協奏曲を演奏。それを機会に私の生涯で、オーケストラ伴奏でモーツァルト協奏曲を20回もやらせて頂き、関西フィルハーモニー管弦楽団の前身、ヴィエールフィルに所属した元プロでもオペラパーク管弦楽団からお呼びがないのを見てもそのレベルの高さが分かる。歌手は関西二期会員の主要なメンバーを揃えたので、不出来なはずがない。そこで舞台の半分を使って、楽譜を見ながら歌ってもよい演奏会形式から臨場感の溢れる立ち回り式を依頼した結果、オペラに近い表現ができた。一昨年から字幕を取り入れたので、あとリアルオペラを表現するには、大舞台と小道具を使う以外にはない。入場料を始め全て無料にして地域社会の人に喜んで貰う催しにはコンベンションホールを無料で提供するというのが大前提で始まったが歌手としてオーケストラバックならギャラが無料でも歌いたいというレベルでは観客は満足できない。実は声楽家は関西二期会のプロの皆さんには雀の涙程度、交通費の名目で支払っ

ている。財源は喜捨箱の寄付金で賄っている。舞台費用、衣裳料、小道具まで手が回らない。そこでお願いだが映像研究の一環として、演出家を任命して研究室の人達と共同して参加して貰えば本格的なオペラに近づくとというより映像による背景が世界のオペラ業界を変えて主力となるのではないか。例えばオペラ「カルメン」のラストシーンは闘牛場の外で、カルメンとホセの二人だけの登場人物でよい。しかし二人だけでは寂しいので、闘牛場の舞台を作ってその前に闘牛場に入る馬に乗ったエスカミリオを手を振って見送る人達を舞台上げて賑やかに演出するからオペラに費用がかかり、文化庁の助成金なしでは絶対にやっていけない。そこで3千万円もかかる大道具を作って、終わったら廃棄する一回限りでなく、アニメ映画の映像のようなスクリーンを正面と側面に設置すれば何度でも使用できるし、レンタルも可能。安くオペラが見られ、文化庁の助成金も不要になるだろう。バレエ「白鳥の湖」だって、踊るのは子供だけ。あとは映像にすればしゃべっているような格好の大人達が大広場の豪華な舞台装置が不要になり、その分安く皆に提供できるのではないか。ミュージカルや歌舞伎を初めいろいろな芝居の舞台がもっと豪華に見せる事ができ、演劇界に世界的大革命を起こす事ができる。ノーベル賞のような基礎分子の研究も必要だが庶民の生活に楽しみが増える事を考えるのも必要ではないか。

来年の阪大オペラリーズの演目は「愛の妙薬」で8月27、28日にコンベンションホールで行われる。実は6年前からある工業会会員に要望されていたがやっと実現できた。どれ程素晴らしいか口では語れない。来て頂いて体感して頂ければ分かる。そこへ工学部の研究成果として映像による大舞台ができれば、それこそ海外からの見学者が多く大ホールが必要になるかも知れない。世界に先駆けた映像革命を是非実現して頂きたい。全ての演劇ファンの為に、人間回復の為に癒しの為に大衆娯楽の為に是非参加して頂きたい。

話は変わるが、82歳でもクラリネットを吹いているので、頼まれば新入生に工業会に入会して貰う為に催すパーティにクラリネットを吹く事がある。マイクを使用するが、学生時代に使ったマイクと大して進歩していない。レコードは76回転からLPテープ、ウォークマン、CD、携帯、

スマホ等々年々大きく進歩しているが、ことマイクについては大きさが小さくなった程度。小さくするなら、イヤリングかバッチ位小さくして衣服に取り付けるかして身につけられないか。歌謡曲を歌う演歌師はマイクを口につけて歌うのが常識なので変えないのか。反対にオペラ歌手は広い劇場でもマイクを使わないので貴重がられるのか。一方大きな声が出せないで、歌唱力は素晴らしいのにオペラ歌手になれない人の為に是非マイクとわからないマイクを開発してもらえないだろうか。そのようなマイクの試作品が研究室にも教室にもレストランでもゴロゴロある。それ程研究して欲しい。今年、来年中に開発してもらわないと「干支の活学」によると60年先まで待たねばならぬ。今建築中の「吹田福利交流研究棟」に工業会は一億円寄付した。その功によるものか、工業会の事務局はそのビルの二階に入ることになっている。今の中之島センターなら新福島まで電車一本で行けるのに、吹田なら二回乗り換えて北千里から歩いて行けぬ。時間も三倍かかり大変不便になるが、この事務局の上は研究室になっている。この研究室を工業会会員なら申請して許可されれば自由に無料で使用できたら、自分の意志でなく契約により定年が来ればクビになる自分が、生きて元気な限り終生働く場があれば、多少不便であっても働く場があれば無給でよい。研究して第二の人生で売れる成果が出れば、使用料を支払え現役時代より収入が増えたとなればメダシ、メダシ。そんな旨い話はないですね。干支によれば今年、来年がチャンスと言えるのですが..。言ってみれば学生は授業がある、試験に卒業論文がある。先生は講義せねばならぬ。学会に出張。報告書の作成。授業の原稿作り等で、いずれも忙しくて中々思う研究を自由にできない。処が定年退職者は一番頭も冴え、充実し時間もある。文化庁も助成金研究成果の実績に応じて支給するという制度なら定年退職者が一番成果を上げるのではないか。企業でもまれていかに儲けるかの苦勞を身にしているからだ。全国の大学では近畿大学が一番儲けているようだ。マグロの養殖で儲けている。これに勝てるには実務経験豊かな熟年パワーだ。鯨や海豚の養殖をして反捕鯨団体グリーンピースを解散させられたら痛快だ。

(電気 昭和32年卒)